東京都知事賞

みんなが、笑った
～下町が教えてくれた家族愛～

石井　芳佳

『お母さん、ただいま！』東京下町。学校帰りに私はいつも、居酒屋をひとりで切り盛りしているお母さんの店を訪ねる。

『おかえり！ほら、これだよ、持って帰んな!!』お母さんはいつも元気に、笑って迎えてくれる。今日はお母さんから『きのこご飯炊いたからとりにおいで』とメールが入っていたので受けとりにきた。カウンターに置かれた、きのこご飯がぎっしり入ったまだふたをしていないタッパーからはふわふわと湯気が出て美味しそうなかおりが漂ってくる。

『お母さん！一杯飲んでく！それから、今日学校でね…』お母さんに報告したい話でとまらない。

『今日も元気がいいねえ』カウンターにいる常連さんがにこにこ笑っている。『わたし、

娘がいなかったから可愛くてしょうがないの。こんな日本酒ばっかのむおっさんだけどね…なんちゃって』そういってお母さんはエプロンを顔にあて笑う。だから照れくさくなって私も笑う。

私と『お母さん』に血のつながりはない。ここは私の行きつけの居酒屋で、そこのママさんと常連客の関係である。私は、ひとりぼっちでここ下町に越してきた。知り合いも友達もいない土地だったが、なぜかすんなり溶け込めた。商店街では八百屋さんや魚屋さんが威勢よく声を張り、お客さん同士が井戸端会議、銭湯にいけばまたそこはそこでわいわい盛り上がっている。そしてこんな風に居酒屋では他の客さんだったり色々な方をお母さんが繋いでくれるから自然と友達になれる。最近見なくなるとどれかのコミュニティーですぐわかる。お互いが気に掛け合っているから医療も防災も自然と成り立つのだ。町内総出の運動会、年中無休のラジオ体操、祭り、御神輿隊など行事の中でもつながりは広がって、続いていく。

ある冬の夜『よしかみたことないでしょう』と居酒屋のお母さんが酉の市に連れていってくれた。商売繁盛願ってくまでを買いに行くのだ。『客や幸せを掻きこむ』という意味

らしい。店が終わったと電話がきたので深夜に浅草へ出発。タクシーをおりるとそこは別世界だった。大小飾られたくまでが高く高く積み重なり深夜というのにキラッキラしていた。くまでを買ったお店の人と一緒に手拍子をしてみんなで商売繁盛を祈願する。大盛況ぶりに興奮を抑えられなかった。テキ屋ではつぶがい、ほたて串、ベビーカステラ…お母さんが沢山買ってくれて、なんだか本当に親子のような気がした。まつり、商店街、銭湯、井戸端会議…こうして伝統が残っていく。地域がつながっていく。若者も高齢者もその中で素晴しい文化に触れながら皆で守ろうと言う気持ちが高まっていく。なんて笑いのたえない、あたたかい場なのだろうと思った。

私は人と人とが笑いあい、つながりあっていくことに人一倍幸せを感じるのかもしれない。こう思えるまで実は長い長い道のりだった。

私は父を憎み、母を憎んでいた。家族愛に飢え、むしろ冷め切っていたのだ。父がいて母がいて、姉がいて、いつも一緒にいられるのに、これ以上の幸せはないだろうに、それぞれの心が悲鳴をあげていた。父と姉は特に仲が悪かった。私が小学生の時姉は勘当され

ついに福岡を出て京都までいった。姉の安否を訪ねては叩かれた。怖くて何も聞けず、会いたくて毎日泣いた。当時周りには片親のいない友達が多く、両親がいるのに苦しいだとか贅沢な悩みを抱えていると思え、幼いなりに情けなかった。誰にもいえずに家出をしては嘆いた。やっとの思いで生きていた。

厳格な父はかなり厳しく私たちを育て、門限五時、土日は遊びにいってはいけないなどいくつものきまりの中、家に閉じこもり、地域にふれあえないでいた。しかもその家では憎み合い、ののしりあい。喧嘩のたえない夫婦で、掃除機が飛んできたり、箸や箸置きを投げ合う日もあった。いつも母はそんな父の悪口を言い、その聞き役は私だった。毎日息が詰まりそうだった。喧騒から逃れたい。そうして私は大学進学で反対を押し切って上京した。ほとんど帰省することはなかった。

『我が家はバラバラだ』

ずっとふれないでおいたことを感じた。このつながりあっている地域の中で、我が子を肩車している夫を奥さんがほほ笑んで見守りながら商店街を歩く風景、公園で色んな家族が笑いあっている風景などをみて。なんて笑いながらいきいきと過ごしているのだろう。

家族ってなんだろうと思った。私ももう少し、家族の笑う顔が見たかった。いままで平気なつもりでいた。子供である自分ばかりつらいと、被害者だと思っていた。けれどきっと皆苦しかったんだ。皆笑う権利があったのに。そう思うと憎しみから許す気持ちに変わっていった。するとなんだか急に、家族の笑い顔が見たくてたまらなくなったのだ。

私は姉と父を仲直りさせようと決意した。無理やり姉を京都から呼び寄せ、一緒に帰省した。姉も父も戸惑い父は一日目、姿を消した。だが辛くなかった。家族という絆の深さを信じられた。不安がる母と姉、そして自分に大丈夫、信じようと何度も言い聞かせた。かつてこんな気持ちをわたしが持つ日がくるなんて思ったこともなかった。

翌朝、父は『ただいま』といって帰ってきた。何気ない日常を何年ぶりに過ごしたのだろう。朝食を食べながら涙が止まらなかった。こうして四人で食卓を囲んでいることがただただ嬉しいのだ。

最後の日の夜、父がふと箸をおき言った。

『お父さんは君たちを平等に育てたかった。ただお姉ちゃんの時は貧しく、君が大学にいきたかったのに、それを叶えてやれなかった』知らなかった。姉の目から涙が流れた。

『だがお父さんは君たちに平等に愛したつもりだ』姉は頷いた。

『ただ、出来の悪い父親で、君たちには随分苦しい思いをさせてしまった。本当に、すまない。』心臓がとまるかと思った。本当に驚いた。父が、頭を下げた。そして、父が泣いていた。父の泣き顔を私は初めてみた。父は顔をくしゃくしゃにして声を上げて泣いた。それを見て母も泣いた。父に優しい目を向けながら。たまらなかった。一体何年もの間このひとは自分を責め、苦しんできたのだろう。ずっと勘違いしたままでなくてよかった。この二人の子供でよかったと、心から思った。

あの帰省を忘れることはないだろう。新幹線のホームで親が最高の笑顔で泣いてたこととか、横見ると姉も泣いてたりとか、そのあと他愛もない話を二人でして帰ったこととか……ただただ、すべてがうれしくて。やっと報われた気がして。

先日、私はまたいつもの居酒屋に行った。すると、ふと客足が途絶え、お母さんとふたりきりになった時があった。

『二人きりもめったにないしお母さんの人生観語ってあげる』ここに通い出して半年だ

が思えばこんな風に話したのは初めてかもしれない。

『まず客観的に見てよしかに言いたいこと…悪いひともいる。利用するひともいる。よしかが思わなくてもいい。いることを知っておきなさい。』

お母さんは続けた。

『よしかは仲間が大事、友達を一番大事にしているね。こころから人間を好きだから悪いところを見つけられない。でも万が一裏切られた時、よしかが、どれっだけ悲しい想いするかが痛いほどわかるの』お母さんが目を見て真剣に話してくれたことに思わず泣いてしまった。ふらふらやってきた意味のわからない田舎娘をこんなにも気にかけてくれるということ、見ていてくれているということに。お母さんは色んな話をしてくれた。お母さんの幼少期だったり嫁いだ頃だったり、人に言える過去言えない過去含め少し涙ぐんでいるように見えた。

『でもそこにくよくよしたってしょうがないのよ。どんな過去も恥ずかしいとは思わない。せっかく生まれてきたんだよ?今を幸せ!と思わないと損じゃん!明日は何もしなくてもやってきてくれるんだからね。お母さんは年をとることを誇りに思うよ』

人には色んな考え方がある。色んな生き方がある。それはどこにいってもそうかもしれない。ただ、私がここで目にしたものは、それを伝えあい共有しあえる場があるということなのだ。お母さんがこんな話をしたのは何かの偶然なんかではない。こんな時間と出会いができる場と機会があちこちにあるのだ。地域全体が家族。地域全体が子供たちや高齢者、お互いを気にかけあっている。そんな空間だからこそ、私の中のあたたかいものも自然と蘇ったのかもしれない。我が家が家族だということ、家族は素晴しいものだということをここの家族のような付き合いの中に教わった。まつり、商店街、銭湯、井戸端会議…この街はずっとこのままあり続けるのだと思う。地域を大事にしよう。この出会いに感謝して、文を終える。